

神仏に共通の概念へ向けて (二)

—比較宗教の一試論—

長谷川 洋三

六 キリスト教の二大教義が崩壊

宗教関係者に向かって「その教義は科学と矛盾しているのでは……」と問いかけると、「宗教と科学は違う。宗教と科学は一緒にして論じるべきものではない。」という声高こゝろたかな反論がしばしば返ってくる。尤も、そんな論争は仏教の場合ほとんど生じないが、キリスト教の場合は日常茶飯事である。それは、仏教には科学と矛盾する教義がほとんどないのに対して、キリスト教の場合は科学上の常識と矛盾するように思える教義や事蹟が多いからである。では、宗教と科学は本当に一緒に論じるべきではないものなのか。この点を分かり易くするために、部族宗教を取り上げてみよう。部族宗教が時代と共に消えていく傾向があるのは、その信仰内容が科学的常識とは極端に矛盾し、その部族外の人々に対してはもとよりのこと、時には部族内にも弊害をもたらす迷信に基づいているものが多いからである。

それが、例えば人肉を食したり、或いは生きた人間あるいは動物を生贄として神に捧げる（これは旧約聖書の創世記二十二章にもみられる）などという極端な弊害を伴う宗教（その次元のものを筆者は宗教とは呼ばないが、世間一般では部族宗教や民族宗教と名付けている）なら、先進国との接触において早急に消滅していくことは衆知である。（しかし、大した弊害がなく、それを信仰する民衆の楽しみとなっている行事を伴う部族宗教なら、これといった意義や意味を当の本人達が分からぬまま伝承されていくケースも多いが。）

では、伝播性が世界的とか普遍的とか言われる宗教の場合はどうか。仏教に関して言うなら、先にも述べたように、科学と矛盾する教義はほとんど見当らない。一見科学的事実ではないと思われる浄土の描写があっても、それは精神の安穏度をあらわす比喩であることがやがて分かるのである。仏教は実に論理的であり、例えば唯識学で言うなら、現代の最先端を行く心理学も及ばぬ程に精緻な人間洞察学であり、医学を含む現代精神科学の先達となる力を持っている。また、一見奇妙にみえる密教の曼陀羅は、実は人間の精神の洞察から生まれた深遠な体系であり、科学と矛盾するものでは全くない。

ではキリスト教の場合はどうか。この場合は、二千年にわたる科学との闘争が見え隠れしている。二千年にわたって間断なく闘争が続いたという意味ではないが、時折その闘争が大きく展開することがあったし、二千年経た現在、キリスト教側が誤っていたことがローマ法王自らによって公言された例もあり、あるいは未解決の問題もあるという意味である。つまり、キリスト教の基盤は、その信者数の多さ（一説では世界人口の三分の一）や、一見したところ堅牢精緻に見える神学とは裏腹に、かなり不安定であるということである。

キリスト教はユダヤ教とは異なる宗教であり、新約聖書（以下「新約」とする）を第一聖典としているが、同時に

ユダヤ教の聖典である旧約聖書(以下、「旧約」とする)を第二の聖典として尊重している。しかし、第二の聖典とは言うけれども、実はキリスト教観の根本は旧約にあるとも言えるのである。何故なら、キリスト教が説く「神」とは、旧約の創世記に出てくる天地創造の神と同一の神であると、キリスト教自体が公言してきたからである。旧約と新約の相違は、神と人間の契約の内容が異なるといふ点だけで、神自体は同一であるというのがキリスト教の教義なのである。(ユダヤ教はそんな解釈は否定し、新約を認めていないが。)つまり、キリスト教は旧約の創世記をそっくりそのまま受け入れることを基盤として発達してきた宗教で、信者は皆それを信じてきた。その意味では、旧約はキリスト教にとって第二聖典というよりは基本聖典であるという方がよりふさわしいのではないかと筆者には思える。ところで、創世記から生まれたキリスト教の二大教義は、

① 天動説(地球中心説)

② 神による人類(アダムとイヴ)の創造

の二つである。この二つは新約から生まれた「三位一体」の教義と並んで、およそ二千年間にわたりキリスト教の基本教義となつて信者の上に君臨し、それを批判する人々に「天罰」を与えてきた。ところで、①の天動説が誕生したのは、創世記一章にある次の記述からである。神が天地の万物を六日間で創られたとする「天地創造」の第一日目に地を創られたと記述されており、第四日目に天の天空に二つの光る物(太陽と月)と星を創り、大きな方(太陽)に昼を治めさせ、小さい方(月)に夜を治めさせられた、と記述されているのである。つまり、地球が第一日目に創られたのに対して、太陽や月や星は第四日目に創られたので、地球が全天体の長兄であり、従つて宇宙の中心であるという天動説が生まれたのであり、それがおよそ二千年間にわたりキリスト教の教義とされてき

たのである。勿論、途中でその説に疑義をはさむ者が居たことは衆知である。ローマ大学の教授であったコペルニクスが、一五四三年五月二十四日の臨終の折にようやく印刷がおわった『天体の回転』という著書の中でその教義を否定したのである。しかし、その著書がバチカン当局の手に渡った時、彼は死者でありながら、宗教裁判で有罪の判決を受けたのである。次に、彼の説を声を出して承認したジョルダーノ・ブルーノは、六年間の投獄生活の後で焚刑（一六〇〇年）に処せられ、その後十年ならずしてコペルニクス説の真実を望遠鏡で証明したガリレオ・ガリレイは七十歳の折に、法王ウルバヌスの命によって投獄され、法廷でひざまずき、自説の廃棄を次のように読みあげることを強要されている。

われ、ガリレイ、齢七十才は、囚われ人としてひざまずき、審問官諸氏の面前において、わが眼前に聖書を取り、手をもってこれに触れつつ、地球が動くという説の誤りと異端を棄て、呪い、嫌悪するものである……。

〔科学と宗教との闘争〕 65頁

しかし、この宗教裁判から三百五十六年後の一九八九年（平成元年）九月二十三日にローマ法王ヨハネ・パウロ二世は、

カトリック教会がガリレオを迫害したのは間違いであった。彼は誠実な信仰者であると同時に、天才的な物理学者である。神学者は常に科学の成果に目を向け、必要なら神学の解釈と教えを再検討する義務がある。

と公式に述べてガリレオの名譽を回復したのである。しかし、世の一般人、少くとも日本人に関する限りで言うなら、今から百年も前から天動説を信じる者など絶無に近かったのである（日本のクリスチャンがどうだったのかは分らないが）。そして現在、天動説に賛意を示す人物は、クリスチャンの間ですら唯の一人もいるとは聞かない。もしいるとすれば、それは信者ではなく狂信者であるという誹謗を受けることだろう。これは、常識の進歩のお陰である。以上の経緯は、二千年にわたって「正当」とされてきたキリスト教の教義が誤っていたことを示すと共に、バチカンの対応が極度に遅いことと、従ってバチカンの權威が信者の上に君臨し得る程に高いものでは必ずしもないことを露わしている。そして最も注目すべき点は、ローマ法王が科学を基準にしてカトリシズムを裁いたということである。

次に、②の「神による人間（Ⅱアダムとイヴ）の創造論」であるが、これもダーウィンが「進化論」を一八五九年に唱えてから雲行きが怪しくなり、キリスト教徒の間ですら信じない人が増えつづけていたのであったが、一九六六年（平成八年）十月二十三日にローマ法王ヨハネ・パウロ二世が法王庁科学アカデミーに寄せた書簡で、ダーウィンの進化論を

既に仮説の域を越えており、カトリックの教えと矛盾しない。

と述べ、百三十余年ぶりに進化論を認める見解を公表したことで決着がついたのである。「決着がついた」と筆者が言うのは、神がアダムとイヴを創ったという論は、神話的比喩としては受け入れることが出来ても、それ以上で

はなく、従つて歴史上の事実ではないという結論が法王によつて出されたということである。ヨハネ・パウロ二世は「進化論はカトリックの教えと矛盾しない」とも述べているが、それは「神によるアダムとイヴの創造を神話的意義としては認める」という意味であるはずであり、神による創造そのものの史実性は否定されたことには代わりがない。これまた、科学を規準として自己を裁いたのだと言える。ところで、今から半世紀も前の一九五〇年すでに、ピオ十二世が回勅で初めて進化論に触れていたのであるが、あくまでも仮説として受け入れるにとどまっていたのであったが、五十年後の一九九六年十月にパウロ二世は、

五十年の回勅から半世紀、数々の科学的発見から進化論は単なる仮説の域を越え、根拠があると認められる。

と述べたのである（十月二十四日のイタリア各紙の報道）。繰り返して言うが、これはバチカンが科学を信頼し、それによつて過去の神学の教義の誤りを認めたことを意味している。そこには、神学は科学と矛盾してはならないという意味が内蔵されている。しかし同時に法王は、

われわれの精神は神からもらつたものであり、人間の精神は進化論と関係ない。

（朝日新聞一九九六年十月二十五日朝刊3頁）

と留保もつけているというのである。その場合、神は科学とどういう関係におかれるのだろうか。ヨハネ・パウロ

二世の言葉を分かり易く整理すると次のようになろう。

人間は他の動物から進化によって誕生したのであり、従って神による人間の創造は神話的比喩としては認めても、それ以上ではなく史実ではない。しかし、人間の精神は神から貰ったものであって、進化論とは関係ない。

ヨハネ・パウロ二世の言葉はコマ切れのように出てくるので、部分部分を見てみるとそれぞれ納得がいくような気がしないでもないが、どこか不自然さが伴うので一挙に書きつづてみると右のような歯切れの悪い文になってしまう。彼の言葉には、「人間の肉体は、他の動物の進化によって出来たが、その精神は進化とは関係がなく、神から貰ったものである」という論法があり、肉体と精神の出どころがそれぞれ別であるという二元論に立っていることが分かる。この思考内容は別の物議をかもし出すはずであり、バチカン神学の底の浅さが少しも払拭されていないのである。科学と闘争しては破れ、その言い訳をするが、その言い訳もまた破られるという繰り返しである。

さて、右に見てきたように、旧約から誕生した「天動説」と「神による人間の創造」の二大教義がローマ法王自らの声明によって崩壊してしまった現在、キリスト教はもはや旧約に拘泥しているべきではなく、新約一つで堅牢な神学を構築しなければならないところにきている。筆者がこのように言うのも、それがなされなければ、多くの無用な闘争が今後も尽きることがないからである。例えば、旧約と科学の矛盾がもたらす弊害は、欧米では予想以上に大きい。具体例をあげてみよう。この場合はプロテスタントである。「地球の起源」をめぐる州単位の、あるいは国家単位の裁判が今でもアメリカ合衆国では何件も生じているのである。それも聖職者がひきおこす紛争であ

る。一例を引用してみよう。

彼（「アイランドのアッシャー大司教」）は『創世記』中の「家系図」をすべて分析し、その結果と聖書から得られるほかの手がかりを総合して、地球が創造されたのは紀元前四〇〇四年一〇月二六日の午前九時だと結論したのである。その日付は、後世の聖書解釈学者たちによっていささかの訂正をされた。しかしそうした聖書学者の下した基本的結論は明瞭である。すなわち、『創世記』が一字一句正しいなら、地球の年齢は数千年を越えないというのである。

（『進化論裁判』18頁）

右のアッシャー大司教のような聖書擁護論者の聖職者が多いため、アメリカ合衆国では進化論を否定し、神による人間の創造を信じる人が国民の四割から五割を占めるといふ統計結果が出ている。そのような人を聖書原理主義者と呼ぶのだが、彼等は地球の誕生は四十六億年の昔だとする科学者の説に対して、地球で数千年以上古いと言われるものは、神がそのように見せかけて創つたにすぎないと主張するのである。彼等の論法によれば、例えばヒマラヤの高所に見られる海の貝殻は、科学者が言うような地殻変動によって海底であったものが太古の昔に隆起したために見られるのではなく、神がそのようにわざわざ見せかけて創つたのだと云うのである。論争がその程度で済むならまだ良いが、進化論を公立学校で教えることを禁止した「反進化論法」（公式には「バトラー法」と呼ばれ、州下院議員のJ・W・バトラーが提出し、一九二五年三月に成立）がアメリカ合衆国では成立してしまった程に論争が高じているのである。その経緯は『進化論裁判』の中では次のように記述されている。

一九二〇年代前半にプロテスタント教会内の保守派から起こったファンダメンタリズム運動は、『創世記』を一
字一句まで信じることを教義とし、とくに反進化論運動に力を注いでいた。進化論を学校で教えることを禁じる
ことを教義とし、とくに反進化論運動に力を注いでいた。進化論を学校で教えることを禁じる反進化論法を、一
つでも多くの州で成立させようとしたのだ。そして、テネシー州のほか、アーカンソー州とミシシッピ州で成立
させることに成功した(法案提出にとりあえず成功したのは一五州)。
〔進化論裁判〕224頁)

そして現実に、高校教師ジョン・トマス・スコープスは、テネシー州内の公立学校で進化論を教えたかどで起訴
され有罪判決を受けたことがあったのである。しかし、最終的には進化論側が勝訴となった経緯を『進化論裁判』
は次のように伝えている。

長期にわたる審議の末に最高裁は、進化論を教えることを禁止した「モンキー法」のすべては違憲であるとの最
終的判断を下した。アーカンソー州とルイジアナ州で新たに制定された、進化論と創造論に同等の授業時間を当
てよとする「同時期」法に対しては、この法律は憲法違反だとする訴訟が出されている。法廷での原告側の作戦
は、創造論科学はヒツジの皮をかぶったオオカミであり、科学の仮面をかぶってはいるが実際にはきわめて宗派
性の強い宗教上の信仰であることを示すというものである。そしてそれが真相であることは明らかである。した
がって、創造論者の努力が最終的に州(あるいは国)の法律として実るといふことにはなりそうにない。

右の引用文で見たように、最高裁では進化論側が勝訴となったのだが、創造論者は黙ってはいず、その後も強固な巻き返しを企てている。その代表的人物の一人が『進化論に疑問あり』(The Facts of Life)を一九九二年に出版した英国のリチャード・ミルトンである。

勿論、先の裁判はアメリカ合衆国での話であつて、進化論と創造論のいずれが正しいかという結着が地球規模でついたわけではない。バチカンが進化論を認めても、プロテスタント系の原理主義者達にとつては痛くもかゆくもないかもしれない。逆にバチカンを「信念のない弱腰ども」と批判することも考えられる。問題は、間違いだつたと判明されるに至つた側は、以後どのような責任をとるかということである。もし創造論が誤りだと判明した場合、聖書の持つ誤つた恐ろしい影響力に今後どのように教会側や国家が対応していくかということなのである。

どの宗教であろうと、それにはまり込んだ信者に対して、その宗教は絶大な影響力を持ち、外部の者がその誤りを指摘しても簡単には是正することは出来ない。筆者自身は、進化論と創造論のいずれが正しいかに関する客観的なデータを持っているわけではない。しかし、筆者は、科学的測定——例えば放射性炭素法を用いた測定——で、紀元前四千四年より遙かに古い時代に誕生したと判明したものを、神がわざわざそのように旧いものであるかに見せかけているにすぎず、ヒマラヤの高所に海でのみ棲息する貝の殻が見られるのは神がわざわざそのように見せかけたのだ、とする聖書の原理主義者達の理論が唐突過ぎていて、神がそんな姑息なことをするはずがないと思われることから、旧約における創造論の根拠が一挙に崩れ去るとみなす者である。

ここでもう一つ断っておくが、筆者は自然科学を絶対視する者ではない。それはまだ始まったばかりの段階であり、宇宙・地球両物理学では理論が一定せず、次から次へと新説にとつて代わられているし、考古学でも学説が目まぐるしく書き変えられていることは、新聞紙上をにぎわしていることから衆知である。科学とは仮説だらけで権威が決して高くはないものであることは科学界自体が認めていることである。しかし、にも拘らず、不動と言えり部分もあり、それに照らしてみれば、旧約の創世記が明らかに史実性を伴わないフィクションであると断定せざるを得ない。極めて単純なこと、例えば「旧約の天地創造が矛盾だらけのフィクションであること」が見抜けずに今でも信じ続けるということは、情報操作によってマインド・コントロールされていることであり、教典の持つ影響力の恐ろしい面を見せつけられる思いである。惑星は恒星の時空のゆがみを回わっている、と宇宙物理学では説明していて、その説は他のどの説よりも現時点では信憑性が高く、従って地球という惑星が太陽という恒星より早く誕生した確率は極端に低い。従って、第一日に地球が創られ、第四日目に太陽と月と星が創られたとする創世記の記述は史実とは逆の作り話であり、そこには神話的意義すら見出せず、ただ民衆を幻惑させる作用をしかかさない、と言わざるを得ない。そして、創世記否定論を打ち破る説得力ある理論を聖書原理主義者が持たないことも事実である。それに、そもそも旧約では、神は万物を六日間で創造し七日目に休息されたとあり、そのためユダヤ教徒は安息日を厳格に守って仕事は一切行わないのが戒律である。しかし、神が七日目に休息したという記述も史実とは考えにくいし、それにキリスト教徒にとつて致命的なことは、その戒律に対するイエスの対応である。安息日に病人を癒したかどで群衆からつめよられたイエスは

わたしの父は今もお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。

(ヨハネ福音書第五章一七節)

と言っておられる。これは、神には安息日がないとイエスが認識しておられたことを示唆している。その点からも、ユダヤ教徒ならともかく、イエスを信奉するキリスト教徒が旧約にみられる六日間の天地創造と七日目の休息を鵜呑みにすることが矛盾であることになる。週に一回の安息日が必要とするのは人間の側であって神ではあるまい。更に、ユダヤ教徒が金曜日を安息日としているのに対して、キリスト教徒が日曜日を安息日としていることも、同じ神を仰ぐにしては矛盾がある。矛盾だらけのことを信じるのは自由と言えば自由なのだが、後になって「誤りだった」と指導者によって言われるとなると、少くとも現在は情報操作によって操られているのだと言わざるを得ない。宗教には盲目的信者が生まれ易い。盲目的信者とその情報操作された状態から救い出すには、一見美しく蠱惑的でも事実ではない創世記の非史実性を聖職者が明晰に分析して公表し、誰からも賛同され得る神学を打ち出す必要がある。例の二つの教学が崩壊したからには、旧約の「創造神」に基礎をおくかぎり、キリスト教神学はいつまでも矛盾がつきまといつづけるはずである。科学に矛盾しない神学を打ち出すことがキリスト教の急務であり、ローマ法王の先の言葉の中にその必要性が内蔵されているのである。

七 新約の神とは何か

ここで恐らく「旧約と新約の相違は神と人間の契約の新旧なのであって、神自体に相違などありはしない」とい

う反論が出てくるはずである。キリスト教は初期の頃からそのような発想をもっていたからこそ、二つの聖書に「新」と「旧」の語句をつけたのでもあった。しかし、旧約の創世記が史実でない主旨のことをローマ法王自らが公言したからには、旧約にこだわりつづけることは不自然であるし、そもそもイエスが契約の新旧について触れたことは一度もないのである(当り前のことではあるが)。今、キリスト教にとって最も重要なことは、旧約は考慮に入れず、従って契約の新旧には一切触れず、神の定義を明晰に打ち出すことである。旧約の神は、エジプト人を敵にまわしユダヤ人のみを守る民族神として描かれているのであり、従ってそれが宇宙の創造神であるはずがない。ユダヤ人以外の民族がそれを尊崇することは、フィクションをフィクションとして見抜く正見を持たないことから生じる一種の迷妄である！

ところで、旧約と新約とでは神に関して共通の事項がある。それは共に神は絶対者であるということである。しかし、同じく絶対者とは言っても、両者のそれにはかなりの相違があることがこれまで指摘されてこなかったのではないだろうか。旧約の神は「天地創造者」ということになっていて、被造物との間には越え難い一線があり、被造者である人間は神から与えられた戒律(十戒)を守ることによってのみ人間らしい人生を全うし得ることになっている。つまり人間は、神の愛によって戒律を授かったが、神に隷属する存在であることを超えることが出来ない位置に置かれているのである。勿論その教義にはそれなりの意義はあろう。何時はみ出して墮落するやも知れない程に心の脆い人間を一つの規範の中にとどめ、墮落を最小限にとどめるといふ意義である。しかし同時に、そこには息づまる閉塞性が伴ってくる。イエスを陥し入れようと次々と戒律をもちだしたパリサイ人に代表さ

れる閉塞性である。パウロは、律法を守るべく仕向けられている面を「内なる人」(ロマ 七ノ二三)と呼び、逆にそれを抑圧する面を「外なる人」(コリントⅡ 四ノ一六)と呼んでいる。「内なる人」は神の御意を知って「律法」と呼ぶが、それをパウロは「理性の律法」と名付ける。一方、「外なる人」が掲げる自己本位の掟をパウロは「罪の律法」(ロマ 七ノ二三)と呼んでいる。実は、あのパリサイ人達は、神からの戒律を「内なる人」として「理性の律法」なるものとして守ろうとしたのではなく、「外なる人」として「罪の律法」なるものとして守ろうとしたのであった。そのため、神の御意を解せず、律法の外形のみにとらわれ、少しでもそれにそぐわなと思われる者を責めようとしたのである。外形にとらわれている自分を誇り、他者を外形によって裁くところにパリサイ人の閉塞性が生まれたのであった。これは、戒律を第一義とする宗教に不可避的に伴う限界である。

一方、新約の神は、人がイエスを通して一体となり得る神である。そこでは戒律は不用とされている。神の愛と一つになることよって人は戒律を超えてしまうのである。戒律が本質的に不要だというのではない。「内なる人」となれば、自ら神の愛と一つになり、従って「理性の律法」は成就されていくのであり、「罪の律法」など生まれる余地がないと言うことである。これを分かり易くするには仏教を引用するのが効果的だろう。仏教にも戒律はあるが、専門的に言うと「凡夫戒」と「仏戒」に二分される。凡夫戒は「……するなかれ」の禁止形であるが、仏戒は「……は出来ない」という達成形である。仏の境地に達した者には「殺す」や「盗る」という心は浮かばない。従って「殺すなかれ。盗るなかれ。」という禁止形の戒律は不用である。高レベルの人の場合では「殺すことは出来ない。盗ることはできない。」という仏の境地が成就されているのであり、それを「仏戒」と言う。イエスが次々と戒律を無視し、安息日に病人を癒すなどの行為をおこなったのは、仏教で言うなら「仏戒」に達していたの

で「凡夫戒」レベルの戒律が超えられてしまったからである。そして、それはイエスにのみ可能なことなのではない。人はイエスの導きによって、あるいはその導きなくしても、「内なる人」となれば神と一つになれるのであり、その時「罪の律法」(「凡夫戒」)は不用となるのである。神と一つになれた人は、誰でもイエスと同一レベルになる可能性を持ち、そればかりかそれ以上になることも可能である、というのが筆者の解釈である。この解釈は現時点では異端とみなされる確率は極めて高いが、筆者は「ヨハネによる福音書」の次の一節からその解釈を得るに至ったのであった。

わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うことを信じなさい。もしそれを信じないなら、業わざそのものによって信じなさい。はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。

〔ヨハネによる福音書〕十四章十一・十二節

イエスを信じる者はイエスと同じ業を行い、あるいはもっと大きい業を行うことが出来るという言葉から、先の筆者の解釈が生まれたのであった。このような解釈はこれまで一度もなかったかもしれない。少くとも、イエスのみを救済者(「キリスト」)だとする従来のキリスト教的発想では考えられないことだろう。しかし、筆者は仏教を多少は学んだ仏教徒であり、これまでの神学に拘束されず自由に聖書を読める立場にいる者であればこそ、仏教との比較においてこのような解釈が出来るのであり、この解釈によってこそイエスの言葉を従来には無かった角度から眺めることが出来るのである。これはむしろ新しい神学を生み出す糸口になる可能性を秘めていよう。この解釈

によつてこそ、キリスト教から科学と矛盾する不用な迷妄は払拭され、キリスト教がより普遍性を持ち、他宗教との接点を持ちうるようになるのではないかと考える。誰でも神と一つになれる具体例をパウロの次の言葉に見ることが出来る。

生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしのうちに生きておられるのである。

〔ガラテア人への手紙〕第二章二十節

パウロが右の言葉を発した時、実はパウロは死んでいて、そこにいるのはキリストだったのである。つまり、狭小な自我が死に、広大無辺の自己が現出したのである。あとは行動をおこしさえすれば、キリストと同じになるはずである。丁度、仏教の「嫡々相承の仏達」が先達の威徳を単伝（一にそつくり伝える）していくように。しかし勿論、パウロは自分をキリストだとうそぶく程に高慢ではなく、「キリストがわたしのうちに生きておられる」や「生きているのは、もはやわたしではない」というふうには、感じたままの素朴で謙虚な思いを述べたのである。彼はイエスが、

子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。

〔ヨハネによる福音書〕五章一九節

と言われたと同じように、自分を空しくして無私となつてしまつた故に、キリストを自分の内に感得し得たのである。それは彼がキリストと一つになつたことを意味して、神学上の大テーマを提起している。実は、キリストと一つになつた彼は、神や聖霊とも一つになつたはずであり、従つて三位一体の地点に達したとも言えるのである。これは、イエスにのみ神性を与えてきたキリスト教側から反撥される解釈であろう。しかし、そもそもイエスにのみ神性を与えることは、イエスが処女マリアから生まれたとする、科学的根拠が何一つない物語から発展した教義であり、それが根拠のない作り話であればこそ、イエスの誕生をめぐつてこれまで、ミルキア・ニコッパ・アイネン・シヨス 単一説や従属説や三條の信條や処女受胎やマリアの無原罪受胎(これはマリアが原罪の汚れなくして母アンナの胎内に宿つたとする) (これはマリアが原罪の汚れなくして母アンナの胎内に宿つたとする) 解釈) などという互いに矛盾し合い錯綜した諸説が噴出し、今なお決着が付かないのである。そしてこれらの諸説は、ヨハネ・パウロ二世の科学性を重視する姿勢とは矛盾する。

筆者は、イエスだけに神聖を付加するのは科学的根拠がないことから受け入れ難く、人間は誰でも三位一体になる可能性を持つと考える。それは、仏教の「仏の三身」の場合が全ての人間にその可能性が与えられていて、人は誰でも仏になり得るとすることと同様であると考えることから生まれた見解である。筆者の説に確証を与えるためには、筆者なりの神の概念を提起する必要がある、それを「ヨハネによる福音書」の検証から行いたいと思う。この福音書の冒頭には次の一節がある。

初めに言があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。この言は、初めに神と共にあつた。万物は言によつて成つた。成つたもので、言によらずに成つたものは何一つなかつた。言の内に命があつた。命は人間を照らす

光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

右の一節には「神」と「言」という二つの語句が出てくる。両者の関係をめぐって、従来の神学は「神が言という『子なる神』を生んだ」という解釈をおこなってきた。その代表的人物がギリシヤの弁証家であった殉教者ユスティノスである。しかしその解釈は、キリスト教の神が、万物を創ったと言われる旧約「創世記」の神と同一の神であるという思い込みの前提に立っている。しかし筆者は、旧約の神は民族神ではあっても天地創造神とは見なし得ないと思うことから、旧約を一切無視して考えてみたい。冒頭の「初めに言があった」という句と「言は神であった」という句の二つから、源初にあったのは神に喩えることが出来る程に絶対的なる「言」であったのだと考えられる。神に喩えたくないものなら喩えなくともよく、「言」だけでもよい。まず初めにあったのは「言」だけだったと考えてみるのである。その場合、「神」は言を靈格化するための一つの手段として用いられたに過ぎないと解釈できる。イエスが自分は神と一体化すると言われ、民衆も神と一体になり得ると言われたのは、実は言と一体化するという意味であればこそ理解できるのである。一方、旧約の神は人間とは一線を画した存在であり、人はそれと一体化することは不可能であり、一方的に拝跪しその戒律に従う隷属的な存在でしかあり得ないことは先に述べた。さて、「ヨハネによる福音書」の中で「初めに言があった」と言われているように、源初にあったのが「言」であったればこそ「万物は言によって成った」と書かれているのであり、ここでは「万物は神によって成った」とは書かれてはいない。では何故言によって万物は成ったのか。それは、「ヨハネによる福音書」で記述されているように「言のうちに命があった」からである。つまり、「言」は万物の基礎にある命を持つ「実体」ということにな

る。命であり光でもある実体から自己発動的に、あるいは因果的に万物が成る、と観る方が科学的（＝自然）である。ユステイノスは「神が、子なる神の言を生んだ」と考えたが、それは彼が、神は物質と何の関わりも持たないとするギリシヤ思考の持主であったからである。そんな思考の持主であった彼は、「神は世界創造以前はひとりであり、御子はいなかった」と考えていて、そのため神は世界を創造しようと思った時、彼に代わってこれをなす代理者を必要としたというのである。神には理性つまり意志（＝ロゴス）があるので、そのロゴスを「子なる神」として生み、そのロゴスに世界を創らせた、というのである。しかし、彼の解釈は回りくどいと筆者には思える。神と言は父子の関係ではなく同一であると考えの方が自然であろう。言を神の特性と考えてもよいが、神は言を靈格化した表現であると捉えることも可能であり、その方がより現実的であると筆者は考える。「ヨハネによる福音書」では、神が言を創ったとは書かれていないし「神に命があり光がある」という言い方もしていない。あくまでも「言に命があり光がある」という言い方である。そして、世にあまりにも多い不条理を見る時、「神による創造」論では説明が苦しく、逆に「言によって万物が成った」とする説ならば、説明が可能となるのである。

ところで、命であり光である言から成った万物であるとしたら、万物もまた命と光をもつはずである。子供は必ず親の形質を受け継ぐからである。その解釈に立つと「悉有仏性」という仏教の発想と等しくなり、万物は言の隷属なのではなく、言と同等に絶対の重みをもつ尊い存在であるということになる。それを民衆に気づかせるのがイエスや釈尊の使命であり、民衆はそれによって自分の根源に目覚めることで根源に即した生き方を求めることになる。その根源への回帰を「レリジョン」もしくは「帰依」というのである。そして、回帰によってこそ人は救われることから、導く先達は救済者と言われるのである。もちろん、救済者はイエスだけではなく、パウロもまた救済

者であり得る。右のことから、レリジョンや帰依（Ⅱ宗教）は人間にとって必要不可欠の最も尊い根源的なあり方であると言える。

八 言とは何か

新約はギリシヤ語で書かれているが、言に当るギリシヤ語は「ロゴス」である。「ロゴス」には「理性」と「言葉」という二つの意味がある。「理性」は大局的に見るなら「法」と同じカテゴリーで捉えることが出来る。「理性」が「法」を生むと言うことも出来るが、「法」が「理性」を孕むと言うことも出来る。別の言い方をすれば、万物の根源には「法」や「理性」があると見える。一方の「言葉」もまた「法」と表裏一体である。「言葉」は「法」に適ったものでなければ「言葉」とはなり得ないからである。以上のことから、「ロゴス」を「法」と言い替えることが出来る。すると、「ヨハネによる福音書」の「命と光をもつロゴス」は「命と光をもつ法」と言い替えることが出来る。すると、万物は「命と光をもつ法」から成ることになる。ここまでくると、仏教とほとんど同じ構造になる。仏教の大日如来とは、六大（Ⅱ地大・水大・火大・風大・空大・識大）を一実たらしめている法（Ⅱ宇宙の法則）を靈格的に捉えた表現であり、法界体性智という智慧と光をもつ「言」でもある、というのが仏教哲学が説くところであるからである。従って、万物は「命と光をもつ法」から成ると言うことも出来る。万物がそれぞれ皆異った資質・能力・表情・寿命をもっているのは、神がそのように創ったからではなく、「命と光をもつ言（Ⅱ法）」が因縁によって自己完結的に結晶するからであろう。従って、死もまたその言（Ⅱ法）から自己完

結的に帰結するのであり、死を神の采配に帰すべきではない。この解釈を受け入れられないなら、信仰者は永久に目を外にのみ向け続ける他存者でありつづけ、死をめぐって他者(例えば神)の恩寵と憐みを求めつづけ、願いが受け入れられない時には信仰を棄てて神仏を呪うという方向へと転向していく場合も出てくるはずである。内省的哲学を欠く一途な他存信仰は迷妄な信仰と紙一重でしかない。

ところで、祈りによって病いが癒され事態が好転することは昔から信じられているし、筆者もまたその可能性を誰にも劣らぬ程に認め信じる者である。しかし、その癒しや好転は、他者としての神仏のせいではなく、自己に内在する弱化した命と光が、宇宙の本源の高レベルの命と光によって充電された時に成就されるのだと考える。癒しや好転の奇蹟はキリスト教にのみあるのではなく、世界の諸宗教にあることがそれを傍証してあまりある。そして、キリスト教で言うなら、宇宙大の命や光をもつ言ロゴス(＝法)をこそ靈格的に「神」と呼び、その神と一つになることをイエスは説かれたのであった。弱い人間には休息日は必要であろうが、言ロゴス(＝法)には休息日は不用であり、従って神にも休息日は不要であり、そこからイエスの「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」(ヨハネによる福音書「五章十七節」という言葉が生まれたのである。

ところで、自己内部の命と光が弱化した時、心身に歪みが生じ、そこから悪といわれる事態が生じると考えることが出来る。仏教ではその歪みを十二因縁の順観で適切に説明し、キリスト教では、

水と霊とによって生まれなければ神の国に入ること出来ない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。

(ヨハネによる福音書「三章五―六節」)

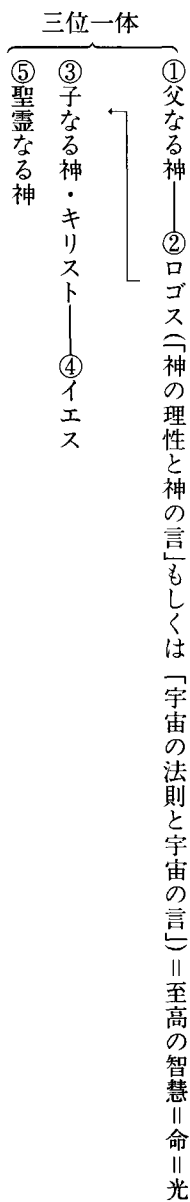
という言葉の中で表現されたのである。この場合の肉は、「命と光（＝水と霊）が涸渴した人間」という意味にとれる。命と光（＝水と霊）が極度に涸渴した人間に歪みが生ずるという意味である。命と光が涸渴したため低次元の日々を生きる者を「肉から生まれた」と表現したまでである。人間には肉から生まれた者と霊から生まれた者の二種類があるという意味ではない。何故なら、肉から生まれたと言われる程に低次元の者でも、水によって洗礼を受けた時、霊の国に生まれ変わると書かれているからである。肉から生まれた者でも洗礼によって霊の国に生まれ変わるということは、肉に宇宙大の命と光が充電されるからである。例えば、回心前のパウロはイエスを迫害する急先峰のユダヤ教徒であり、その意味では肉の人であったが、回心によって霊の人となったのであった。

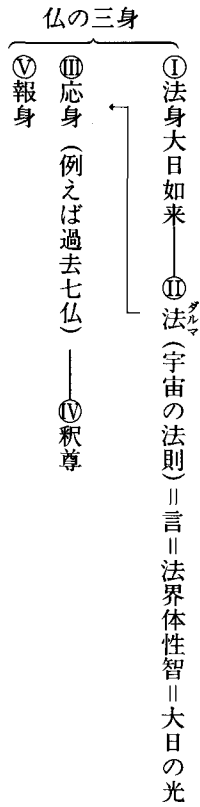
ところで、宇宙物理学者ホーキング教授によれば、宇宙の誕生に神が関与した可能性はゼロだという。その場合の「神」とは、例えば旧約「創世記」で描かれているような、人間と同じような容姿を持ち行動する存在者のことである気配があり、そのような神が宇宙の誕生に関与したことをホーキング教授は否定されたのであっただろう。もし「神」という語句ではなく、「言」や「法」という語句であったなら、ホーキング教授が否定されたとは思えない。宇宙は誕生した時から、言（＝法）ともいべきものによって作動していることは誰人も否定は出来ないだろう。

一方、欧米の科学者の中では神の存在を信じる人が多く、また月面に降り立った飛行士の多くは神がすぐ直近かにいることを強く実感したと語っている。その場合の「神」とは、宇宙の神秘を体感した時の強烈な感慨の直截的表現でこそあれ、「創世記」の五章一節で「神は人を創造された日、神に似せてこれを造られた」と書かれている

よくな次元の神であるとは思えない。筆者が言いたいのは、旧約には天地創造の神が描かれてはいるが、矛盾だらけで、おまけにユダヤ人のみを擁護していることから、ユダヤ人が願望によって造った民族神であると言わざるを得ないということである。もし宇宙に真の創造神がいるとしても、それは見ることも出来ず、聞くことも出来まい。そして実は、ロゴスや法も見ることが出来ず聞くことも出来ないものであり、人はその作用をただ森羅万象の中に感受し得るだけである。神それ自体はロゴスや法と同様に絶対に見ることが出来ないことから「絶対無」と言われもするのである。そして、「絶対無」でありつつも、森羅万象の中にその作用が顕はたらわれているとしたら、森羅万象と表裏の関係にあることになる。その時、筆者の脳裏には「五蘊皆空」という句がよみがえるのである。ここまで来た時、キリスト教の神は旧約の神と結びつけるよりは、仏教の大日如来との関係で捉える方がより適正なのではないかという思いが去来するのである。次に両者の対比表をかかげてみる。

これは筆者が想定する対比である。「三位一体」の①②③④⑤は、「仏の三身」の①②③④⑤とそれぞれ対応し相似する概念であると筆者は考える。





仏教の場合、多くの仏にさまざまな固有名詞がついているので多仏教に見えるが、実は大本は大日如来の一仏に帰すのであり、他の諸仏は大日如来の多様な作用はたらきの一つ一つを言い当てた名称に他ならない。では、大日如来という固有名詞は何を指すのか。それは、六大（地大・水大・火大・風大・空大・識大）という宇宙の作用はたらきを靈格的に表現した名称に過ぎない。六大が一つの有機性をもって作用すると考え、その統一された貌ようすを「一実」と呼び、総じて「六大一実」と名づけ、その「六大一実」を靈格的に大日如来と称したまでである。「一仏」とか「一実」などという工合に「一」という文字が伴うが、一神教で「創造神はただ一神のみ」という言い方をする時のように「一」に固執しているのではない。六大の作用はたらきの有機性をあらわしているため、実は数字では表現され得ないものである。六大が宇宙の森羅万象において作用する作用はたらきを大日如来と表現したまでである。その意味で、一神教でいう神が実は宇宙の森羅万象において作用する働きであるとすれば、大日如来と同じ基盤に立つことになる。唯一の大きな違いは、大日如来を「創造仏」と言わないのに対し、一神教の神は「創造神」と呼ぶため、「一」に固執し「一」以外を排斥することである。しかし、旧約の神が真の意味での創造神とは考えられないことは既に述べ

たし、ホーキング教授が宇宙の誕生に神が関与した確率をゼロだと述べている。また、「ヨハネによる福音書」の神は、人がそれと入我我入し得る神であることから、これまた創造神とは認め難い。宇宙の絶対力であるとは言えても、創造神であるとは言いがたい。創造神は被造物と一線を画するから、人との入我我入は不可能だからである。「ヨハネによる福音書」の神は、「言」を靈格化したものであり、「言」とは六大を一実たらしめている絶対力をもつ「法」と等しいと筆者は考える。

ところで、大日如来も神も、作用はたらきとして捉えるなら、森羅万象に顕われていると指摘できるが、それ自体を見ることも出来ず、聞くことも出来ない。その意味では、西田幾多郎以後の京都学派で用いられてきた「絶対無」という表現は適正である。ホーキング教授が宇宙の誕生に神が関与する余地は全く認められないと言われたが、それについてキリスト教徒と論じることには無駄であろう。水かけ論に終始することは明白だからである。それより、宇宙に絶対力というものがあるか否かという問いの方がより現実的である。そして、もしそれがあるとすれば、それが人間とどのように関わるかということが問われなければならない。それが人間外にあるのか、それとも人間の内外共にあるのか、という問いが更に問われなければならない。

九 神仏は一ではなく空である

これまでのキリスト教では、神を「唯一絶対」と解釈する唯一神論が支配的であり、そこからキリスト教は一神教であると言われてきた。しかし、それすらも旧約から生まれた発想である。絶対者である神は、人間（＝アダム

とイウ)を創つた後では彼等を祝福し「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」(創世記一章二十八節)と言われたことになっている。つまり、旧約では神が人を支配し、人が他の動植物を支配するという階層制の構図となっていて、人間は自然を支配する権限を神から授かっているという発想が生まれたのである。この旧約を基本教典としているキリスト教国の間では、仏教国におけるよりは宗教戦争が遙かに多いことは自然の成り行きであつたかもしれない。闘争性はユダヤ教やイスラム教にも共通する性質である。一神教が持つ支配性を指摘されてきたキリスト者の中には、それを憂える人もいて、現代プロテスタント神学の代表者であるユルゲン・モルトマン氏もその一人である。氏はチュービンゲン大学を退職した一九九四年に『J・モルトマン組織神学論叢』全五巻を著わした人物であるが、一九九六年十月に来日し、東京・信濃町教会での講演で次のように述べておられる。

たしかに、この四百年の西歐人は旧約聖書の言葉『地を従わせよ』に忠実でありすぎた。神は超越者で、地上は人間のものと考へがちだつた。しかし、本来のキリスト教は、イスラム教の唯一神論と違って、三位一体の神です。「神は愛なり」の、交わりの神なのです。この大自然は、人間の所有物でなく、ともに神に造られた家族です。トマス福音書には「木を割ってみよ。石を持ち上げてみよ。そこに私を見いださるう」というキリストの言葉もあります。

(一九九六年十月十五日、朝日新聞夕刊11頁)

モルトマン氏の言葉には、キリスト教の教義が支配性・階層性を帯びていたことへの反省とそこからの転換を希

望する意識があらわれている。しかし、氏は「本来のキリスト教は……」と言う言い方をしながらも、旧約を捨ててはいない。つまり、旧約の神がいつも氏の心の片隅にあるのであり、旧約の神と新約の神の明確な区別が出来ていない。それは氏ばかりでなく、恐らくキリスト者でそれを断行した人はこれまで絶無であったであろうし、これまでの歴史からしてそれをを行う勇氣ある人がキリスト者から出るとも考えにくい。その限り、キリスト教には永久に矛盾がつきまとうはずである。いったん信者になると、フィクションをフィクションとして見抜けず、フィクションを史実とみなすという錯覚にとらわれる傾向がどうしても生じるだろうし、指導層からの教学において益々情報操作されていくであろうからである。教育が裏目に出た時の恐ろしい面である。

ここで筆者は、神を「唯一」として捉えることの誤りを指摘してみたいと思う。一神教では偶像崇拜を嫌う。それ自体は適正なことであるし、仏教にも偶像崇拜はない。仏像に向かつて礼拝するのは偶像を崇拜するためではない。仏という高い境地を心に呼びさます縁として安置されるのであり、金仏・石仏・木仏それ自体を拝むためであるのではない。誤解している仏教信者がいるとしても、それはその信者の錯覚であって、仏教の教学の誤りではない。さて、一神教では偶像崇拜は嫌うが、実は旧約でもコーランでも神は語り、怒り、時には姿をあらわしている。その意味では、神は対象化され限定化されていることとなり、有限の神というイメージは払拭できない。更に踏み込んで言うなら、そのような神は人間によって造られた被造神である気配が濃くなるのである。筆者は神が実在しないと言っているのではない。神は限定化や対象化され得ず、従って「一なるもの」という捉え方は出来ないということなのである。では何と言えよのか。

宗教学者・阿部正雄氏が、一九八四年にハワイで開かれた東西宗教交流会議の席で、中世から「ケノーシス（無

にする」と呼ばれてきた神理解について敷衍され、神を一ではなく絶対無として捉えて注目された。(これは平成七年十二月二十六日の朝日新聞夕刊にも紹介されている。) それに対して、ドイツの神学者ハンス・キュンク博士は「神は絶対の一である」と反論したが、阿部氏は「神を絶対の一とするのは、なお神を対象化することになる。無と解すべきではないか。」と再反論しておられる。阿部氏は、西田幾多郎に始まって田辺元、西谷啓治へと受けつがれた京都学派の「絶対無」の視点から神を新しく解釈し直されたのであった。阿部氏は、新約の「ピリピ人への手紙」の中の

(キリストは)自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。

(二・六―七)

という言葉を、西田哲学の「絶対無」の観点から新しく解釈されたのである。もし阿部氏が、神とは三とか二とか一とかという数字で対象化すべきものではなく、数値を超えているという意味で「絶対無」という表現を用いられただのであるなら、筆者がこれまでたどってきた論旨と合致しており、筆者としては異論はない。神を一として捉える欧米神学より遙かに高次元の捉え方である。しかし、中世からのケノーシス(＝無にする)という神理解や「ピリピ人への手紙」の例の部分などは、「(神もしくはキリストは)一ではなく無である」と言っているわけではない！一であることを否定せずそれを低めることを意味しているにすぎない。「ピリピ人への手紙」の例の部分の日本語訳「自分を無にして……」の「無」を誤解してはならない。この「無」はゼロという意味ではなく、「僕の身分になり、人間と同じ者になられた」という意味であり、一という状況がそれによってくつがえされるという性

質のものではない。「自分を無にして」の部分の英訳聖書は

But made himself of no reputation

である。それを直訳すれば、「自分を（名声高きものとしてではなく）低いものとされた」となり、「無」の意味など全くない。それなら、キリストは自分を一のまま低められたに過ぎないことになる。従って、阿部氏とハンス・キュンク博士の「一か絶対無か」の論争は初めから論争にはなり得ていないものであったと言わざるを得ない。少くとも「ケノーシス」という語句や「ピリピ人への手紙」を根拠として神を一ではなく絶対無であるとする論旨は初めからズレているのである。日本語訳聖書では、先の部分は「自分を無にして」と訳されているものもあるが、「おのれをむなしくして」と訳されているものもあり、日本語訳だけを見ていると混乱してきて真意がはかりかねてしまうのだが、前後をよく読む時、「自分を低いものとされた」という意味であることが分かり、その箇所をもって神が一であることを否定する根拠とすることは出来ないことが判明するのである。自分を高いものとしてではなく低いものとして謙虚な姿勢をとられたという意味なのである。更に加えるなら、神を「一ではなく絶対無である」として捉えることは、「三でもなく二でも一でもなく、絶対無である」ということと同じであり、結局は数を意識しているというイメージしか伝わってこない面があり、神が持つはずの最も重要な「妙用」のイメージが伝わってこない難点がある。阿部氏が神を「絶対無」と言われた時、イエスの言動の働きの中に神の妙用があらわれているという思いを持っておられたのかも知れない。しかしそうであるとしても、その場合、神の妙用はイエ

スにのみあらわれ得るといふ思いが、阿部氏にはあるのではないかと推理され、それなら筆者は賛成しかねる。三位一体はイエスにのみあらわれるのではなく、全ての人間に可能性があると筆者は考えることから、その発想には賛成しかねるのである。そこで筆者は試論として、「神は多でも一でもなく、絶対力を有する空である」として捉えてみたいのである。

「空」という語句は「絶対無」とは異り、数の感覚や意識が伴うことはゼロであり、しかも宇宙に遍満している神の妙用はたらきがおのずから伴ってくる。ただし、この場合、「空」という表現に一方的に仏教的イメージを嗅ぎとって抵抗感を覚える人々は、ユダヤ教徒やキリスト教徒やイスラム教徒には多くいるかもしれない。しかしそれは誤解である。旧約はユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三宗教で尊重されているものであるが、その中の「伝道の書」には「空」という語句が実に三十八回も使われていることに注目していただきたい。もちろんここで、日本語では共に「空」ではあっても、サンスクリット語とヘブライ語の原典では言葉は異なるという指摘はなされることだろう。その通りである。そこで、次にその点を検証しておこう。「空」に匹敵するサンスクリット語は「シューニヤ」であり、同じく「空」に匹敵するヘブライ語は「ヘベル」であって、当然両者は異なる。

『現代ヘブライ語辞典』（キリスト聖書塾発行）には、「ヘベル」の意味として

① 息

② 蒸気・湯気

③ 空・空虚・むなしさ・はかなさ

の三つが出ている。つまり「ヘベル」という語句は、「息」や「蒸気」などへ生命の息吹ききんを示唆する意味と、「空

しき」「虚空」などというへ非生命性」を示唆する意味の、一見相矛盾する二つの意味をもっていることが分る。別の言い方をすれば、「息」や「蒸気」は形こそ持たないが生命の始動を意味しているのだが、それが「空虚」と同一の語句なのである。「生命」が「空虚」と同義であると言ってもよい。それは、生命が「はかなくむなし」存在であるという主観的な意味をもっているというよりは、むしろ生命が「空虚から誕生し空虚へと帰っていく」という客観的様相を持つことを意味していないか。それは、例えば仏教における「無常」という語句が、現在では「はかない」という主観的末梢的な「感」じで捉えられているが、本来は客観的事実として「観」られていた「恒常のものはない」という認識であったことと同一の構造を持つてはいはしないか。これは現在の時点では筆者の推理の域を出ず、誰に聞いても明晰な答が返ってこないもののだが、生命を神がお創りになったというユダヤ教の発想からすれば妥当性を持つ推理だと思われるのである。神がお創りになったものが「空しい」というイメージは古代ユダヤ人の心にあつたとは考えにくいからである。ゼロの虚空から生命が神によって誕生したとするイメージが彼等にはあつたと推理する方がずつと妥当性をもつと考えられるのである。

なるほど「伝道の書」に出てくる「空」は、客観的「観」によってというよりは、主観的「感」によって捉えられていて、「はかない」「むなし」「さびしい」「かなしい」のイメージが濃厚に伴っていることは事実である。だが、それは、「伝道の書」が成立した時代（紀元前二〇〇年—一五〇年）の影響を多分に受けているためにすぎない。当時ユダヤは外国人の圧政を受けて悲惨と混乱をきわめており、ユダヤ人はその宗教をまでも踏みにじられて生きる望みを失っていたのである。そんな社会状況下のため人は一切を「空しい」と嘆息する以外にもらす言葉がなかったのであり、そこから「伝道の書」の全体を覆う嘆息が生まれたのである。しかし、ヘブライ語の「へべ

ル」は元来、「空虚」という意味以上の頻度で、「息」や「蒸気」の意味として用いられていることが分かる。そこからしても、生の始動性を示唆する「息」や「蒸気」などの意味が「空しさ」よりは優位の意味であることが推理できる。先にも述べたことだが、旧約は神による万物の創造を記録する書である。従って、もし万物が空しいものであれば、神によって創られた被造物の意義がなくなってしまうし、それを創造した神の力もまた空しい存在であることになってしまう。ユダヤ人にとって、それは不謹慎きわまる発想であるだろう。「息」や「蒸気」は、目に見えない所から生じてまた消えていくという意味では、感覚的に言うなら空しいと思えなくもないが、生命の息吹きであるという意味では万物の根元であることが観想的に捉え得るのである。神が土で人の形を創り、これに息を吹きかけたことから人間が生まれたと旧約はしているからである。息は神の命にも等しいのである。

ここで直ちに連想されるのは仏教の「空」である。それは、日本では虚空性やそれに類似した意味でのみ捉えられてきたが、その原語であるサンスクリット語の「シューニヤ」を『梵和大辞典』では「膨張すること、中空であること、空虚、欠如」と訳している。それはヘブライ語の「ヘベル」とそっくりである。一言で言うなら、「ふくらむ虚空」ということになろうか。「ふくらむもの」は膨張するエネルギーの作用をあらわしている。「空」は一見したところ虚空であるか見えながら、縁起によってさまざまな現象をとっているその現象そのものと、現象の奥の根元の両者を言いあらわす言葉なのである。「五蘊皆空」という句は、それを言い当てた句である。つまり、「現象化して躍動する生命」が「空」と言われているわけである。そのことから、筆者は「空」に、従来訳出されてきた「虚空性」という意味以外に「み仏の御命」という意味を与えて『般若心経』を和訳し、平成元年に恒文社から出版したのであった。「空」に「み仏の御命」という意味を与えて和訳することは、日本の『般若心経』研究史に

おいては恐らく筆者が初めてだったと思うが、それは唐突な解釈ではなく、むしろ仏教の奥義であり、仏教史の最後に開花した密教から明晰に抽出し得る思想でもあったのである。(この詳細な論証は、筆者の論稿「般若心経をめぐる二つの新説」(早稲田人文自然科学研究第五十号)に詳述されている。)

八 空の智慧(上智と般若)

話を元に戻す。神は多でもなく一でもなく空である、と筆者は捉えるのであるが、この観点に立った時はじめて神は万物の中にその妙用を妙用のまま示すことが観想されるのである。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などが説く神は、厳しい戒律もしくは罰を与えるので、逆にその神は人間が創造力によって創造した被造神のイメージがつきまとうし、一神をめぐって三宗教が三様の神概念を持つため争いが絶えないことから、どの神が本当の神なのか判断できず、結局は神を一として捉える方法に限界があるという結論に達せざるを得ない。一方、神を「絶対無」と定義することは、少くとも「ピリピ人への手紙」を基にする限り不可能であることも見てきたし、一ではなく絶対無だと主張する仕方には数へのこだわりがつきまとい、神の妙用も感じられない難点があることも見てきた。それに対し、神を空と解する時、無用なるものは一切消え、その本来の妙用がおのずから妙用として機能することが見えてくる。そして、「神は宇宙に遍満する」といれてきた従来の捉え方を満足させることも出来るのである。どの宗教にも戒律や罰則が見られるが、その原型は宇宙に内在する智慧であろう。キリスト教ではその智慧を「上智」と呼び、仏教では「般若」と呼び、その智慧が各宗教の中で戒律となっているのだと筆者は考えるのである。

る。

さて、筆者は先に「唯一神と言われているものは、神が自らを開示したものと言うよりは、人間の願望の恣意性が神を創り上げたのだと言わざるを得ない」と述べたが、もちろん妄想によって創り上げたという意味ではない。宇宙には智慧に基づく妙用が作用していて、その妙用を人間が靈格化して特定の固有名詞（例えばエホバやアラアなど）を与えたものであるということなのである。だが、ひとたび固有名詞を与えれば、それは「一なるもの」として固定化せざるを得ず、そこから唯一神というイメージが生じてしまう。しかしその妙用は、現時点の人間の智慧や知識を超えているものなので、本来は命名することなど出来ないはずである。

ところで、現在でこそ三宗教では神を特定の名前で呼んでいるが、古代のユダヤ人は神を言葉にすることが出来ないとしていた。そのため、原ヘブライ語の聖書には「エホバ」という語はなかったのである。あるのはヘブライ文字の中の Y・H・V・H（ヨド・ヘイ・バウ・ヘイ）の四文字だけで、イスラエルの大祭司のみがその発音を知っており、大祭司から大祭司へと口伝えで伝えられ、年に一度だけ贖罪の日に発声されたことである。この語を発して神の霊をこの地に呼び、人々に罪を払いのけてもらうのだという。一般人はこの語を発音できず、また発音は禁止されているが、この語にゆき当たった時は「アドナイ（主）」と呼ぶのだといわれる。旧約の英訳者がこの箇所に来て意味が分からず訳しようがなかった。そこでそれを「主」と呼ぼうというので、Y・H・V・H の語に「アドナイ ADONAI」から母音をとってつけ「YAHYAH」（ヤーヴェー）と発音した。それが後に「EHOVAH（エホバ）」になったのだと言われている。この命名の歴史は、古代ユダヤ人が神は命名できないものであることを知っていたことを物語っている。ただし、これはユダヤ教に限ったことではなく、キリスト教やイスラ

ム教も本来は神には特定の固有名詞をつけることは出来ないはずである。神が、宇宙を創造した目に見えない偉大な実在であるとしたら、小さな被造物である人間は見えない神に命名することなど出来るものではないからである。逆に、神が人間の創造力によって創造された抽象概念であるとしたら、その抽象概念にたとえ立派な固有名詞を与えてみても、それは大した存在ではない。それに、或る民族が自分の言語を用いて固有名詞を与えることは、その言語で神を限定することに他ならない。つまり、神を命名した時から宗教紛争の種子が播かれたと言っても過言ではない。そもそも、神に特定の名前をつけることは、それを一に限定化する愚を犯していることであり、そこから紛争が生じるのだといえる。

先の「宇宙の智慧の妙用」は、それに特定の固有名詞を与えなければ、地球上の全民族に何時でも通用するのである。丁度、空気や水が全人類に共通して通用するように。H₂Oという液体を「ミズ」と発音した場合と、「ウォーター」と発音した場合とは、言葉は異っても実体は同一である。それと同じように、エホバとアラは言葉こそ異っても実体が同一であることは有り得ることである。仮に二種類のH₂Oが、そこに含まれる雑多な成分の違い(例えばカルシウムの多い水や、カリウムが多い水や、ナトリウムの多い水、などの差があること)によって質が異るとしても、H₂Oであることには変わりがないように、エホバとアラが名前を離れた時、その根源が同一であることを否定する根拠は何一つない。もし共にすぐれた宗教なら、それは空という妙用に気づきそれを説こうとしたものであった確率は高い。だが、それに固有名詞を与えて一に限定し虚構性を付加していった時、墮落と紛争が始まったように思えるのである。

ところで仏教の場合は、例の宇宙の絶対力に大日如来という靈格名を与えている。それも、固有名詞を与えた命

名であることには変わりがない。しかし仏教の場合は、一神教とは違って靈格名に執着せず、「六大一実」や「真如」などという非靈格名で呼ぶこともある。仏教の場合、靈格名はフィクションであることは初めから承知済みである。人間は名称に執着しすぎる傾向があることから、靈格名を一切抜いたところで「宇宙の絶対力の妙用」を中心に対話をする時、世界宗教者会議は従来自己主張の強かった次元から一転して円滑にいくのではあるまいか。

九 神仏の妙用は人間の呼吸にもあらわれる

ところで、古代ユダヤ人は神を発声すること、つまり命名することは出来ないことを知っていて、原ヘブライ語の聖書にはエホバという語がなかったことは先に述べた。あるのはヘブライ文字の中のY・H・V・Hの四文字だけで、イラエルの大祭司のみがその発音の仕方を知っていて大祭司から大祭司へと口伝えで伝えられ、年に一回だけ贖罪の日に発声されたことも先に紹介した。しかし、筆者の私見だが、恐らく概念としての抽象名詞や固有名詞を与えることなら一般のユダヤ人として可能だっただろう。例えば「至高の存在者」とか「至高の絶対者」などの表現なら、彼等として可能だっただろう。しかし、当時のユダヤ人は神そのものを神そのものとして如実に表現することを求め、しかもそれが極端に困難であると感じていたのではなかったのか。少くとも一般人には不可能だと考えていたことは事実である。一般人はこの四文字を発音することは出来ないが、大祭司のみが知っていたという。そのことは、発声することは極端に難しいにしても不可能ではないことを意味していよう。では、大祭司のみが発声可能であるということはどういうことなのか。それは、その発音には客観性がないことを意味していよう。一般

に言葉は記号であり、従って客観性を有するが、Y・H・V・Hに関する限り、それは客観的な発音をもつ記号ではないのだと推理できる。だからこそ、特別訓練された大祭司のみが発声でき、一般人には発声できなかったのであらう。「犬」「猫」「水」「美」などという普通名詞・物質名詞・抽象名詞などの場合、それを分かり易い発音で表現することは可能で、その発音も客観性を持ち得る。また「阿弥陀如来」「薬師如来」「観世音菩薩」などの固有名詞は、それぞれが持つ特定の働きに基づいて命名されているので客観的な概念を持ち、発音もまた客観性を持ち得る。ところがY・H・V・Hを発声する場合、発声する個々人の呼吸を抜きにしてはあり得ないのであり、客観的でもないが、さりとて単に主観的なものであるというのでもなく、発声する個々人の呼吸、(もつと厳密な言い方をすれば)生命そのものと深く関わるものであるのではないのか。発音そのものは客観性を持たないが、ひとたび発声されれば客観的な現象が生じるという性質のものではないのか。旧約「出エジプト記」三章十四節によれば、神はモーゼにご自身を「エヒイエ・アシエル・エヒイエ」だと言われたという。それは英訳では I AM THAT I AM と訳されている。筆者が和訳をすれば「私は(如何なる時にも如何なる場所にも) 実在するものである」となる。宇宙に遍在するという意味である。しかしそれは名前というよりは存在の仕方についての説明に近い。一方、名前らしいものとして、Y・H・V・Hが古来からあるのだが、何故発音が極端に難しい子音だけの表示なのか。それは、筆者の推理だが、Y・H・V・Hは本当は抽象概念ではなく、空や呼吸と深く関わるからではないのか。Y・H・V・Hは空そのものであり、その実在を証明するためには呼吸が不可欠なのではないのか。

筆者はここで、息や蒸気を意味する「へベル」をどうしても思い出してしまうのであるが、Y・H・V・Hの発声は生命の始動を喚びさます高レベルの呼吸と深く関係するものではないのか。そしてここで、別の連想が自ら筆

者の脳裏に浮かぶのである。筆者が熟知している禪の高僧故 T・M 師（中国で禪と密教の両方を修行され、元総理や元警視総監はじめ、政財界の多くの人々が参禅している）は、直刀法や遠隔点火法や波静め法やその他の超常現象をひきおこす道力を持つておられたが、九字を切る時をはじめ、法を生じさせる必要がある時に「阿吽」の呼吸を裂帛の気合いで発声されるのであったが、それは弟子の法者達や他の人々が発する「ア・ウン」という発音ではなく、定まって「ヤ！ウエイ！」（正確には表示できない）とでもいう不思議な発声であったことである。「阿吽」の呼吸としてそんな発声をされるのであるが、「気の抜けたへんへん」では法は生じないぞ」というのが口癖であった。「ア」はサンスクリットの第一文字の音であり、「ウン」は最後の文字の音である。阿吽の「阿」は、人が生まれて最初に発する音声であるので、サンスクリット語五十音の最初の音（＝衆声の母）とされ、宇宙の一切の初めをあらわす。つまり、「阿」は森羅万象の根源であつて、後天的に生まれたものでなければ、何時か滅していくというものでもなく、本来常住にして変遷することのない自性法身・諸法の実相だと言われている。そのため「阿字本不生」という句も生まれたのだが、右のことから「阿」字を大日如来とお呼びすることもするのである。一方の「吽」は、人が一生の最後において発する音だという。以上のことから、宇宙の始めと終わり、あるいは人の一生の始めと終わりを同時に発声することで宇宙の生命と一体になるのが「阿吽」の法息であるというのである。弟子の法者達が発する「阿吽」の発声では、いくら力強く大きな音声のそれでも、道力を生み出す程の法息にはなり得ないのであったが、その高僧の場合は不思議な超常現象をひきおこす道力を生むのであった。

ところで、「阿吽」という語句は、概念化された記号としての言葉であるが、その意味ではユダヤの「Y・H・V・H」という文字と同じである。だが、「ア・ウン」が本当に生命を持ったものになるには、もはや記号として

の文字から離れざるを得ず、発声による以外には方法がない。しかも発声すれば済むというものではなく、生命がこもる法息でなければならぬ。例の高僧が「ア・ウン」に生命をこめるためには、裂帛の気合いのこもった「ヤーウエイ！」という不思議な発声でなければならぬのである。ところで、その発音は、大祭司のみが発声できるといふ「Y・H・V・H」の正式の発音と思われるものとほとんど同一に近いものではなかったのか、という推理を筆者はどうしてもしてしまうのである。色彩の場合もそうであるが、音が持つ不思議な威力もまた東西に共通したものを多分に持つ。しかし、ここで断っておかなければならないことは、その高僧はユダヤ教やキリスト教およびイスラム教に関しては、関心も知識もゼロに等しく、「Y・H・V・H」についても全く知識は持っておられなかったことである。従って、その「ア・ウン」の発声が「Y・H・V・H」の発音に似ていて、仮に両者の根源が同一であることが将来説明されることがあつたにしても、そこには模倣は全くなく、偶然の一致であつたということである。ただし、その高僧の師匠であつた中国の高僧・印光法師はこれまた偉大な道力のある人であつたことから、チベット・インド・ユダヤなどに流れる共通の秘儀ともいふべきものがあり、それが伝わつたことも考えられる。ともあれ、「ア・ウン」の発声と同様に、「Y・H・V・H」は人間が神力を発揮するキーワードだったのではないのか。大祭司達のみが発声の仕方を知つていた「Y・H・V・H」の発音とは、実は生命を生む法息のこもつた「ア・ウン」に類似した発音だったのでないのか。「Y・H・V・H」を正しく発声した時、大祭司は恐らく神と合一した境地に達し、仏教という道力・法力にも匹敵する力を生じたのではなかつたか。

ここで到達する結論の一つとして、神仏の妙用は、個々の生命体を抜きにしてあるのではないということである。

例えば、人間の中に神仏の力が内在していて、それが正しい方法を通して顕現するということである。真言密教では「我即大日」という。「我れが大日そのものである」という意味である。大日と入我我入することによって人間が大日そのものになるという表現をとる場合もあるし、大日の種子が初めから授かっていてそれが顕現するという表現をとることもある。これを冷笑する人は、これが真言密教で教える秘儀であることを知らないからである。そのような人は、次の事を思い出して欲しい。二十世紀に入って、多くの科学者はおしなべて「人間は小宇宙である」と言うようになり、人間の身体や心の驚異的な働きをつぶさに見せられた一般人はそれを否定することが一度もなかったことである。人間は正しく宇宙の縮図と言ってもさしつかえない驚異的な身心の仕組みをもつものであり、従って小宇宙であることはまぎれもない事実である。人間を意味する五蘊は、宇宙を意味する六大と同一の意味をもつのである。これを認める時「我即ち大日なり」は奇弁でもなければ大言壮語でもなく、人間の真相を言い当てた言葉であることに気づかなければならないのである。

さて、大祭司達が正しく「Y・H・V・H」を発声した時、神と合一し、仏教で言う道力・法力を得ていたというのが筆者の想像だが、それが出来なければ只の学僧にすぎず、大祭司とは呼べなかったのではなかったか。そして実は、ユダヤ教徒であったイエスは、職階としては大祭司ではなかったにしても、実力としては大祭司並みかそれ以上の力を有していて、神との合一によって道力・法力を得ていたために奇蹟を行っていたのではなかったかと推理される。聖書に書かれている奇蹟の全てが事実であったか否かは誰にも分からない。バーバラ・スィーリングの『イエスのミステリー』によれば、奇蹟は象徴にすぎないということになるが、治病をはじめとするいくつかの奇蹟は本当にあったものと筆者は考える。治病に関して言うなら、真言密教の「加持」は、仏が与える「お加護」を

信仰者が「受持」することであり、それによって信仰者の願いが成就することを意味する語句である。真言僧の故
 O・R師は加事によって多くの治病をされたことで著名であった。その事実からすれば、新約の治病の奇蹟は實際
 にあった事象であったと考えることは決して唐突なことではない。神仏とは「空」であり、その意味でのみ「絶対
 無」とも言えるのである、と筆者は考える。そして、その空が森羅万象そのままにその妙用を顕わすのだと考える。
 実は、仏教の「五蘊皆空」はそれを言い当てた句である。森羅万象は神仏の妙用をいただいており、従って人間は
 本来誰でも、イエスや釈尊と同様に、「三位一体」のキリストや「三身一体」の応身仏となる可能性を秘めている
 というのが筆者の解釈である。実は、仏教では「誰でも仏となる時は釈迦牟尼仏になるのだ」(道元禪師の言葉)と
 説かれているのである。つまり応身仏になるということである。キリスト教神学者の故滝沢克己氏は、神と人との
 関わりを「第一義の接触」と「第二義の接触」の二つに分けて説明されたことは良く知られている。人間は誰でも、
 信仰を持つとうが持つまいが、初めから神と接触しているとし、それを「第一義の接触」と名づけ、次に神信仰に入
 った時を「第二義の接触」と名づけられたのである。それは分かり易い説明のだが、神と人が分離していればこ
 そ「接触」という表現となるのであり、その「分離」故に神と人の二元論に立っていると考える。そして、二元論
 に立つかぎり、神と人との間には断絶があり、両者は「一」には成り得ない。それでは、神は所詮彼岸の対象でし
 かない。一方、両者が「一」となりうる神学上の解釈があっても良いのではないか。

先にも述べたように、神とはそれ自体を見ることが聞くことも出来ないという意味では絶対無であり、しかも森
 羅万象と表裏の関係にあることから「空」と言えるというのが筆者の解釈なのである。そして「五蘊皆空」の句が
 示すように、空(＝神仏)が森羅万象としてその妙用を顕わしていると考える。その場合、神仏と人は「一」とな

る契機は初めから授かっていて一元論となる。仏教の場合、少くとも真言密教では、人は初めから大日なのである。そして、禪でいう「本覚」と「始覚」や「本証」と「妙修」もびたりとこれに重なる。人間は初めから覚者であるが、それに目覚めてそれに相応しい姿勢・行動をとった時にその覚性が表に顕われるということである。その時、神仏と人間は「一」になれるのである。「接触」ではなく「一」になれるのである。勿論、真の意味での「一」となることは至難であろうが、仏教の場合「入我我入」という句がその可能性を保証しているし、キリスト教の場合「ヨハネによる福音書」の数ヶ所にわたって出てくる

わたしが父の内におり、父がわたしの内におられる。

(例えば十四章十節及び十一節その他)

という句がそれを保証している。この句は仏教の「入我我入」と同一構造であり、しかもイエスのみが父と入我我入できるというのではなく、人間には誰にでもその可能性があるのである。その可能性は、

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながって
いれば、その人は豊かに実を結ぶ。
(「ヨハネによる福音書」十五章五節)

の句によって証明済みである。イエスを信じることによって神とつながり、その結果実を結ぶというのである。たまたまこの場合は、イエスを通して神とつながるのだが、イエス無しでも人は神と入我我入することが出来るとす

るプロテスタント系の解釈（クエイカー教派）もあり、それは釈尊を通さずとも大日如来と直接に交流できるとする真言密教の教義と同一構造である。

最後に断わっておく。筆者は、仏と同様に神もまた空であり、人は神の生命そのものを初めから授かっているという私見を展開してきたし、それによってこそ神は彼岸ではなく此岸において個々人がその身のまま合一する可能性を持つとも述べた。しかし、現実の人間は汚染していることも事実である。それをどう解釈すれば良いのか。仏教なら、十二因縁によって簡単に説明できるが、キリスト教の場合は「言」のもつ「命と光」の涸渇によって説明がつこう。それらを「ヘルツ」の強弱による興味深い説明を展開する電気工学系の学者もおられるが、ここでは割愛する。

十 死もまた空の智慧である

一神教では、戒律は神から授かったものとされている。その点で、人間が作った仏教の戒律とは同一レベルで扱われるべきではないと言います。しかし筆者は、戒律とは宇宙に本来内在する智慧（仏教で言うなら「実相般若」や「法界体性智」など）から自ら生まれるものであって、その点では神から与えられようと人間が作ろうと変わりがないと考える。全ての生命体にはそれぞれの定まりもしくは掟がある。ルールと言っても良い。その本源は宇宙に本来内在する智慧であり、そこから生まれるものであり、人間の場合はそれが「戒」となったまでであろう。一神教の「戒律」は神から授かり、一方の仏教の「戒律」は人間が作ったと言われているが、例えば神から授かっ

たと言われる「モーゼの十戒」のうち、後半の五つは仏教の戒律と同一と言ってよい。神がその程度の戒律しか与えないとしたら、人間が作っても良かったわけであり、仏教の場合は人間が作っているという意味では仏教徒の方がレベルが上であるという評価が生まれ、一神教側は不快感を禁じ得ないことだろう。そのような差異・差別を一掃するには、宇宙に内在する智慧から自ら結晶したものと考える方が両者にとって望ましい。実は、もつとはつきりと言ってしまうと、十戒は神から授かったものではなく、モーゼを含む指導者達が作ったものなのである。エジプトで奴隷生活をしていたヘブル人達はモーゼに率いられて脱出はしたが、食糧も水もとほしいシナイの荒野をさまよううちに、そんな自由よりも衣食に事欠かなかったエジプトでの奴隷生活を懐かしむようになっていった。モーゼを含む指導者達はこれを愁いて会議を開き、信仰共同体として結束するために、ヘブル人を守ってくれる神とヘブル人の契約を成文化して人々に公布した。それが十戒なのである。人々がそれを無視したり軽視することによって共同体が崩壊しないように、神への畏怖と絶対服従をもうち出した。特に第二の戒「……わたしは主、あなたの神。わたしは嫉妬深い神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える」は、飴と鞭の二つを用意して、人々の心を十戒に釘付けにしたのである。しかも、モーゼがシナイ山の頂上で神からその十戒を直接に授かったように見せかけた演出の見事さは抜群で、ヘブル人達を一致団結させたのであった。それは、彼等がその後二千年間流浪の民となったにも拘らず、二十世紀になって再びイスラエル国家を樹立する原動力となったのである。しかし、問題はその後キリスト教徒達の反応である。十戒は天地創造の神から授かったものと信じこみ、その神と新しい契約を結んで出来たものが新約であると信じ込んで今日に及んでいることが問題なのである。民族をまとめたモーゼのフィクシ

ヨンと演出は賞賛に価するが、まさか三千年以上にもわたって世界の諸民族にそれが史実であると錯覚させることになるとは、モーゼ自身思ってもいなかったことだろう。仏教とは違って、フィクションの上に成り立っているために、次から次へと科学との矛盾が噴き出してくることがキリスト教のアキレス腱なのである。

ところで宇宙には、万物を万物たらしめている絶対力があり、そこには智慧が内在する。その絶対力が森羅万象の中に妙用を示しているので、森羅万象の中に智慧が顕現する。人の歩き、走り、坐る、などなどの行為一切はその絶対力から生じ、食べ、飲み、眠る、などなどの行為は、これまた同じ絶対力から生じる行為である。もし、その絶対力を靈格的に表現して神仏と呼ぶならば、それらの行為は神仏の行為ということになる。禪の四威儀（行・住・坐・臥）は、そのような認識から生まれている。人間が本来の自己（ \parallel 仏 \parallel 宇宙の絶対力）そのものとして生きること、つまり自己になりきることが四威儀の意味である。しかしながら、現実の人間の行為は本来の姿から遠ざかっている。仏教でいう十二因縁の故であり、キリスト教でいう墮落の故である。それに気付いた時懺悔の心がおき、また本来の尊厳さを神仏という象徴を通して垣間見た時歎喜・法悦が生じる。その歎喜・法悦を『法華三部経』では大懺悔と呼んでいるのである。世界的伝播性をもつ宗教は、懺悔から始まって大懺悔に向かって歩む宗教であるという点で共通している。

そして実は、死もまた宇宙の絶対力の故にやってくる宇宙生命の相（ \parallel 時節）の一つであり、「人間にとって宿命的な、不可解不可避なもの」という否定的な捉え方ではなく、「人間が、自分の中に組み込まれているので是認しているもの」という肯定的な捉え方をすべきものであろう。死もまた宇宙の智慧の結果である。考えてもみるがよい。地上に生物が誕生した時以来、もし一切の生物が死ぬことがなかったならどうなるのか。超過密

状態となり、新しい生命が生まれる余地が一切無くなっているだろう。例えば人間の居住空間は極端に狭くなり、壘一帖の面積内に百兆人以上の人が住まなければならなくなっているはずである。死は無常という宇宙の摂理の智慧から必然的にやってくる、自然なもの、肯定すべきものとして受けとめるべきものであろう。(事故死や戦争死や若すぎる病死はその限りではない。) 落葉樹は秋に、そして常緑樹は春に、毎年落葉し新しい葉が生まれる。人間の死はそれと変わることがない。死は宇宙の智慧からくる必然現象であり、宇宙生命の一相である。その意味で、筆者はカソリック神父のO・I氏を通して見ることの出来るキリスト者の死に対する見解が、あまりにも往生ぎわが悪く思えて納得がいかない。O・I氏は次のように言われる。

愛はあくまで死に逆う。しかも、その戦いは完全に敗北に終わることを知ればこそ、さらに悲惨である。そこにおいて、「生と死」、生は死に逆らい、死は生に挑む。死は、単に生の終わりとして受けとめられて済むようなものではない、さらさらない。また、大いなる宇宙の霊に自らを委ねて、永遠の休息に入ることだけで、済まされるものでもない。「死と祈り」(『岩波講座 宗教と科学7 死の科学と宗教』一九九三年二月五日 第一刷発行 352頁)

愛する者が死ぬ時、人は苦悩し死に逆らうというのがO・I氏の主旨である。氏にとって死は容認し難く不可解なものとして映る。しかし、逆らってみても完全に敗北におわるとも言っておられる。(逆らうから、敗北でないものが敗北に感じられるのだ)では、キリスト者は死に際して何をすればよいのか。それは氏の次の言葉にあらわれている。

キリスト者は、何を祈り求めるか。ここでも明白である。「父なる神のみ旨が行われますように」という一語に尽きる。衣食は要らない、というのではない。「これらのものはみな加えて与えられる」のである。しかし、神のみ旨よりも、衣食ばかりに思い悩む人間の愚かさが、そこに指摘されている。キリスト者の一大事は、何よりもまず、神の国と、神のみ旨である。そこでの祈りの第一目的は、いつ、どこにあっても、「み旨の行われんことを」という願いである。食べることも、着ることも、生きることも、一切が、その願いに結ばれてのみ価値がある。

(同 358頁)

死に逆らっても果たし得ないので神の国に入ることを願う、というのがO・I氏の主旨である。しかしどこかおかしくはないだろうか。キリスト者は、神は絶対だという。それなら死とは「神のみ旨」による結果必然的にやってくるものだと考えるべきではないのか。その場合、死に逆らうことは「神のみ旨」に逆らうことになってしまふ。逆に、もし「神のみ旨」に反するのが死だとしたら、神と死は相矛盾するものであることとなり、神は絶対ではなくなり、宇宙は背反する二つの世界に分断されていることになる。そんな認識では根本事は何一つ解決されず、死から逃避するための避難所として神の国が設定されたのではないかと疑われてしまふ。そんな認識では、落葉ですら忌まわしいものとなるのだろう。そして、動植物が土に還って他の動植物を育てる栄養源になるというエコロジ―もまた否定されることにならざるを得ない。キリスト者は、旧約の内容からして、野菜・果物は言うに及ばず、家畜もまた神から与えられた食物であるという発想を持つが、他の動植物を捕食することは、自分の生が他者の死

に依存していることに他ならない。従って、食物が神からあたえられているという発想自体が、死を忌嫌う先の発想と相矛盾することになる。キリスト者も他の動植物を捕食して生きている点で、他者の死に依存している。その死に対しては、それが神から授かったものと考えるため苦悩は感じないが、自分の死や愛する者の死に際してのみ苦悩し死に逆らうというのは、都合の良すぎる自己中心的な発想ではないのか。また、愛する者の死に接した時死に逆らう心がおきることをO・I氏は語っておられるが、それは愛していない者の死に対しては何の痛みも逆らいの心も生じないことを逆に暗証していよう。それもまた、死に対する真摯な追求ではあり得ない。つまり、神父O・I氏を通してみられるカソリシズムの発想は、あまりにも人間中心的、自己中心的、生存中心のすぎ、しかも往生ぎわが悪い。

O・I氏の先の「逆らいの論理」は、横断歩道を渡りはじめた幼稚園児の列に居睡り運転のダンプカーが突っ込んだために生じた、十七名の園児の痛ましい死を一例として書かれたもののだが、氏の死に対しての「逆らいの論理」は事故死のみに対してなされたものではない。親鸞上人の「平生業成」や禅の「生死一如」や「平生是道」や「自然法爾」の生死一如観に対しても批判的であることから知れるように、死そのものに対して逆らう姿勢があるのである。それは氏の次の言葉からも知れる。

しかし、この深遠にして広大な仏教の存在論的視野は、果たして生死の謎を解くのに十分であると言えるであろうか。そこには、さらに鋭く、深く、仏教の核心に迫る問いがあつてよいのではなからうか。東洋の聖者シヤカ
の至高の英智も、なお達し得ない人間の死の神秘があるのではなからうか。

○・I氏が死に対して逆らいの心を持たれるのは、自分の死や愛する者の死に対してのみ目が向けられているところから来ている気配がある。宇宙生命やエコロジーが視野にはなく、卑近な死にのみ焦点が合わせられ、そこに不条理と恐怖を覚える一方で、それを美化もしくは正当化するために「父なる神のみ旨が行われますように」という結論に至っている気配がある。そもそも、死が神のみ旨の故であるとしたら、初めから逆らう必要がなかったはずである。氏の場合、あくまでも生と死の二元論に立ち、生は尊ぶが死は厭い、あわよくば最後の審判の日に神のみ旨によって救われたいとする願望がありはしないか。それは、コスモロジーに欠けた「生」中心主義からくる祈りである。しかし、人はどんなに祈っても必ず死ぬのである。死が宇宙の智慧から帰結するものだからである。

※

以上、筆者は、神仏に共通の概念を求めてこの小論を書いてきた。結果的に言うなら、仏教を基準としてキリスト教神学を洗い直すという方法をとったように見えるかもしれない。しかし、意図的におこなったのではない。そもそも、キリスト教にはさまざまな神学があり、固定したものなど一つもない。筆者は新約に心曳かれて長年読み続けてきたが、初めから(多くの日本人がそうであると思うのだが)ただの一度も「天動説」や「神によるアダムとイヴの創造説」を信じたことがない。新約にその二つが説かれてはいないのだから当たり前と言えば当たり前だが、ともかく信じたことは一度もない。また、新約に関係する教義である「マリアの処女受胎」をも一度たりとも

信じたことがない。従ってイエスのみを神の御子とみなすところから生まれた「三位一体」説をも信じたことがないのである。また、イエスが全人類の罪過を贖って十字架にかけられたが故に人類は神に宥和させられ救済されたとする贖罪の教義をも信じたことがない。それらはいずれもイエスが説かれた教学ではなく、後世の神学者たちの「説」でしかない。

筆者は新約を物語として楽しく読み、イエスが戒律にとらわれず、むしろそれを超えた自由な信仰者であり、しかも多くの病める人々を癒す道力や徳力を持った一人の人間であったと思う者である。従って、「三位一体」(これは後世に生まれた語句だが)という語句に接しても、それは誰にでも可能性が与えられている境地であると思ってしまう。筆者は無理に従来の神学を曲げたのではなく、自然にこのような解釈になってしまうのである。仏教を学んできた筆者にはごく自然にこのような新約解釈が生じてしまうのである。そして、一九九〇年代に入ってローマ法王の公言により、「天動説」や「神による人間の創造」が科学性に欠けるとして否定されたのであったが、やがて「マリアの処女受胎」も科学性に欠ける神話だと公言される日がやってくる予感が多分にある。すると、今後の神学は筆者のような解釈によってこそ普遍性を持ち得るのではないかと考えるのである。

神仏は共に、宇宙の絶対力であり、「空」であるが故に「絶対無」であるが、森羅万象の中にその妙用を顕わしていることから「妙有」でもあると考える。そして、人間は初めからその妙用を授かっているが故に、適正な生き方をするることによって、その人に妙有そのものが顕われてくる。それが例えばキリスト・イエスの風光となり、あるいは心身・釈尊の風光となったまでである。そして、イエスや釈尊のみだけではなく、人間は誰でもキリストもしくは心身となる種子(可能性)を授かっている。パウロが「キリストがわたしのうちに生きておられる」と言

い、道元禪師が「一日の行持是れ諸仏の種子なり、諸仏の行持なり。謂ゆる諸仏とは釈迦牟尼仏なり、釈迦牟尼仏是れ即心是仏なり」と言われる所以である。以上のことから、従来の神学に捉われていない筆者の解釈によれば、神仏の概念はほとんど同一にも近いものである。筆者のこの論は、世界最大の宗教団体であるという自負を持つ誇り高いキリスト教徒にとつては容易には受け入れられないことだろう。しかしキリスト教はフィクションの上になり立っていることはまぎれもない事実であり、ローマ法王の発言にそれが露われてきているのである。民族を救うために成立したユダヤ教の功用は大きかった。しかしキリスト教は民族宗教ではない。それが普遍性を持つためには、旧約と完全に袂を分かつところで神学を構築しなければならぬのである。さもなければ永久に科学との闘争が続くだろう。一方、筆者の神の概念によれば、キリスト教は科学と共存出来るのみならず、「万教帰一」の源泉もほの見えてくるのである。

完

参考文献

- 『死の科学と宗教』(岩波書店、一九九三年二月五日第一刷発行)
 『絶対無と神』(春秋社、一九八六年三月十日新装第一刷発行)
 『第2バチカン公会議 公文書全集』(中央出版社、一九九二年四月二十日初版六刷)
 ナイルズ・エルドリッジ『進化論裁判』(平河出版社、一九九二年十月三十日第二刷発行)
 J・ヒック『宗教多元主義』(法蔵館、一九九四年五月二十日初版第二刷発行)
 阿部正雄『根源からの出発』(法蔵館、一九九六年二月二十日初版第一刷発行)
 カレン・アームストロング『神の歴史』(柏書房、一九九五年五月一日第一刷発行)
 リチャード・ミルトン『進化論に疑問あり』(心交社、一九九五年十月十日第一刷発行)

滝沢克己『仏教とキリスト教』(昭和五十六年十一月二十五日第二版七刷)

『キリスト教の謎』(新人物往来社、一九九三年十二月二十五日発行)

バーバラ・スーリング『イエスのミステリー』(日本放送出版協会、一九九四年三月十日第四刷発行)

宮坂宥勝『密教世界の構造』(筑摩書房、一九九〇年七月十五日第九刷発行)

『密教とキリスト教』(創元社、昭和六十年七月十日第一版第三刷発行)

A・D・ホワイト著、森島恒雄訳『科学と宗教との闘争』(岩波書店、一九八四年五月十日第三十一刷発行)